

下宅部遺跡から見た 縄文時代の漆工技術

Lacquerwork Techniques Found in the Shimo-yakebe Site

千葉敏朗

CHIBA Toshiro

はじめに

①ウルシ樹液の採取について

②漆液容器について

③漆塗り土器

④漆による補修

まとめ

【論文要旨】

本論は下宅部遺跡から出土した様々な漆工関連資料から、縄文時代の漆工技術を復元したものである。

縄文時代では唯一の出土資料であるウルシ樹液採取の痕跡を持つ杭に関しては、その傷の在り方についていくつかの課題が残されていた。その解決のために、石器によるウルシ樹液採取実験を行った。その結果と出土資料の再検討から、縄文人がウルシ林を維持管理するためにウルシの木を間伐していたことを論証し、出土した杭はその有効利用であったことを指摘した。

多数が出土している漆液容器には、保管用・調整加工用・塗布用・補修用等の用途が想定され、残存している漆の種類や状況から、それぞれが漆工のどの工程に対応する漆液容器かを検討し、そして、個々の容器の分析から、容量や使用方法を推定した。

漆塗り土器については、黒色漆塗り土器に関して二つの課題を設定した。一つは、塗膜の状態から黒色漆塗り土器を2種類に大別し、それぞれが高温塗布と常温塗布に対応するという仮説を立て、それを実体顕微鏡による塗膜の表面観察・断面観察と高温塗布実験の結果から検討した。もう一つは、炭化物付着が顕著な漆塗り土器や、漆そのものが炭化している土器、漆塗膜が火で炙られている土器の存在から、漆塗り土器を火に掛けることについて検討した。

最後に土器の漆補修に関して、損傷の仕方と補修方法・補修に使用する漆の種類の対応関係を明らかにし、具体的な補修技術について検討した。

【キーワード】ウルシ樹液採取、ウルシ林管理、漆液容器、高温硬化法、漆補修